

7月14日 オノマトペ

宮澤賢治の作品には独特のオノマトペが出てくる。小学校で習った『オツベルと象』（その当時はオツベルと表記されていた）という童話の“のんのんのんのん”に、私は子どもながらに魅せられてしまった。稲こき器の音だという。

オノマトペとは擬音語（擬声語）・擬態語のことで、慣用的に用いられているものが多い。例えば、象の鳴き声を“パオーン”と表現したり、強い風を“ビュウビュウ”と表記したり。小学生の私にとって、“のんのんのんのん”はかなり新鮮だった。

このオノマトペが優れているのは、独特の響きだけではない。ひらがなが与える視覚的印象をも計算して、賢治が用いているところである。農夫たちがオツベルの命じるままに、無味乾燥な動作を繰り返している様子が、目に見えるようだ。

白象をだましてこき使うオツベル。弱り切った白象が、助けを求めて仲間の手紙を送る。窮状を知った仲間の象はオツベルの工場に向かう。“グララアガア、グララアガア”。今度はカタカナである。私は象の鳴き声をこのように表現した作家をほかに知らない。

奇をてらった表現が優れているわけではない。使い古された表現を否定するつもりもない。しかし、その状況を適切に表現する「言葉」を探りたい。

“どっどど どどうど どどうど どどう”。作曲もたしなんだ賢治にかかると、風も踊り出すようだ。

